

学びに向かう力などの評価をめぐって私見－新学習指導要領の考えを生かすには

無藤 隆（白梅学園大学）

1．学習指導要領の新しい方向

1) 自ら学び続ける学び手を育てる。

自分で考え判断し学んでいく自律的学習者。

仲間とともに学ぶ協同的学習者。

いかなる場でも学んでいく状況的学習者。

2) 知識と思考と学びに向かう力の循環的關係を実現する。

知識と思考は独立ではなく、相互に支え合い、片方の学びがもう一つと循環する。

知識は互いに結びつき構造化されることで思考に有効なものとなる。

思考は対象についての知識を活用して有効な問題解決となる。

学びに向かう力とは、情意性（意欲・意志）、社会性（特に協同性）、メタ認知（自らの学びを自覚し見渡す力）などからなり、知識と思考の循環過程を支え促し、同時に、その過程の中で伸びていく。

3) できるように手立ての指導を進める。

知識も思考も学びに向かう力も、それを向上させるのは具体的なできることを可能にする手立て（技、スキル）と道具を使ってである。

学習指導とはそういったスキル・道具を生徒に手渡し、身に付ける場が基本となる。

思考は思考の道具（ツール）を使ったスキル（技）の獲得により伸びていく。

同様に、情意的・社会的力は自己統制や対話・協同のスキルとツールにより発揮され、伸びていく。

2．学びに向かう力の評価

心情・意欲それ自体とともに、その意欲や意志、協同性や自覚性などを喚起し維持するやり方（スキル）の指導と評価を行う。

自己学習でのやり方の工夫やスキルを評価できる。

持続的な学習活動などではそれがよく見えるだろう。

なお、思いやり等、人間性に関わる場所は個人内評価としてその子どもの良さを取り出すもので段階での評価を行うことには向いていない。教師がその育成において心がけていくべきことである。

3．観点別の評価

上記の考え方から、資質・能力の三つの柱に対応した観点を立てることができる。

その観点から指導の改善とともに、学習者自身の学習の見直しと改善を図る。

単によくできたかどうかを超えて、具体的なやり方やスキルやパフォーマンスで具体的に捉える。

4．単元単位の評価

毎時間の評価ではなく、学習のまとめりとしての単元などを単位として評価する。
そのための評価課題や作品などでの読み取り法を開発する。
評価のフィードバックを生徒に対して行い、また指導を補う時間を確保する。

5. 評価を学び指導するポイントを伝える場とする

指導と評価が一体であるとは、日頃の授業や単元単位とともに、学期などでも行われる。
評価を通して指導の改善を教師が図る。

評価を伝えることにより、生徒自身が学習の仕方の改善や不足を補う、また得意な点に自信を持つなどの機能を果たす。

とりわけ、学びに向かう力など、テストできないところはこういった話し合いの場が意味を持つ。

6. 通知表は子ども・保護者とともに学習のあり方を考える場である

通知表ないしそれに相当する保護者と子どもへのフィードバックの機会を設ける。

それは数値とともに、その内容の要点を伝えるべきである。

それを受けて、どう学習していくか、また指導していく予定かなどを伝える。

それは特に学びに向かう力などでは、通知表や面談や日頃の授業でのフィードバック等を総合して行う。

7. 所見欄の生かし方

日頃から単元などでの生徒の学びのあり方やそこでの成果などを簡単にまとめておく。

所見とはそれらの内の顕著に伸びているところや良さははっきりしたところを要約するものである。

改めてすべてを精査するというより、日頃の反映を基本とする。

8. 評定のあり方

評定とは最も簡便にその子どもの進み具合を表すものである。

同時に、学校としての説明責任の一端でもある。

保護者などにそれを示すことで最小限の責務を学校を果たしていることが伝わるだろう。

個人内評価や所見などはそこには反映しようがないので、所見や面談等の質的な仕方での伝えることになる。

なお、評定を受験のための内申書に直結するやり方については、その善し悪し・あり方を含めて、検討が必要である。

8. 学びに向かう力などの評価への提案のまとめ

子ども自らがいかにして学びに向かう力に含まれることを伸ばし、持続して活用するかの手立ての獲得や利用を中心に見ていってはどうか。

人間性に関わる部分は個人内の良さ・伸びを見て、面談を中心に伝える。

要録の記載は法的な最小限の記載であり、実際の子ども（そして保護者）とのコミュニ

ケーションの中で特に学びに向かう力の評価は活かされる。日頃の授業や折に触れての様子、また個別の指導や対話などの中で比較的フォーマルな通知表なども活かされよう。

教師が自らの実践を振り返り、よくしていくのに、学びに向かう力の様子を含めて、評価し、その伸張がどうすれば可能かの資料を日頃の子どもの様子や発表・作品などから捉えていく。